

受講番号 18066 学校名 西部中学校 氏名 谷岡 大洋

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 2年2組 生徒数 27 名
 科目名 第2学年 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 NEW HORIZON English course 2

クラスの様子・特徴

ほとんどの生徒が、与えられた課題に対し、前向きに取り組もうとすることができる。基本的には明るく、活発なクラスではあるが、私語が多くなったり、話がそれしてしまうこともある。ペアワークやグループ活動を通して、支援が必要な生徒もいる。

問題の確定

基礎的な語彙や構文力が定着しておらず、英語に対して苦手意識が強く、「英語」と聞いただけで敬遠してしまう生徒もいる。

予備調査

A 授業の観察

コミュニケーション活動やリーディング、自己表現を取り入れた授業を行っているが、苦手意識が強い生徒もいる。また、BINGO等の簡単なゲームには積極的に参加する生徒が多く見られる。

B 生徒による授業評価

英語の授業が好きですか? 「はい」44%、「いいえ」28%。自分に英語の授業で力がついていると思いますか? 「はい」72%、「いいえ」12%。英語で難しいと思うことは何か? ・単語を覚えること。・日本語との語順の違い。・読めない

C 学力データ

4月に行なったCRTの結果は聞くこと70.2点 話すこと60.2点 読むこと60.1点 書くこと54.8点であり、書くことの点が最も低かった。また、定期テストでも、書くことや単語・熟語に関する問いに対する正答率が低い。

リサーチ・クエスチョン

基礎・基本の能力の定着のために、語彙力をどのように伸ばせばよいか。

仮説・実践・検証

仮説1

英語を読むことができずに、何を書いているかも分からない状態では、その内容の理解は難しいのではないかと考え、全体での英文の読みの練習、シャドウイングから、ペアでの練習、同時通訳を行うなどの練習を通して、英語を読むことに少しでも慣れていくことができる、単語、熟語の定着にもつながっていくのではないかと。

実践1

教科書の本文や単語の音読の練習のあと、シャドウイング、同時通訳をし、英語を声に出して読む機会を多くした。それについては評価をしたり、点数をつけたりするわけではなく、最終的には挙手による発表のみとした。また、それらの活動のほとんどは、普段から授業で使っているペアでの活動とした。

検証1

評価をしたり、点数をつけたりしないことから、明るい雰囲気の中で取り組めていたように思う。また、英語を読むことに対する抵抗は少しずつ減っているように感じた。定期テスト前に行った音読テストにおいても、A評価(アクセントや抑揚に注意して読むまたは暗唱することができる)の生徒が、以前は10名を越えたことはなかったが、今回は12名だった。しかし、英語が苦手な生徒の中には、取り組みに参加しにくいものもいた。

仮説2

授業にインプット活動を継続して取り入れていくことで、語彙力を高める。そのまゝとして、単語テストを行う。それが英語力に対する自信や、基礎・基本の定着につながるのではないかと。

実践2

教科書の1～2の単元の重要単語や基本表現をまとめた弾丸インプットというプリントを配り、毎時間10～15個ずつの割合でインプット活動を行った。インプットした後はペアでそれぞれお互いに英語と日本語による問題を出し合い、チェックし合う形を取った。制限時間内にいくつの単語を覚えられるかという活動もし、最終的には、シート1枚につき1回の単語テストを行った。

検証2

活動自体は直接評価につなげたりしたわけではないが、インプットシートをチェックしたところ、英語が苦手な生徒も6～7割の割合で正解できていた。また、活動中の雰囲気も、ゲーム感覚で取り組めていたように感じた。また、定期テストの単語や熟語などの語彙を問う問題の正答率も、以前の50%前後から55～65%位と上がっている。

仮説3

予備調査のアンケートによると、「英語の難しいところ」という質問に対し、「日本語との語順の違い」という答えが最も多かった。単語を単体としてではなく、文として練習する中で、語順を感覚的に覚えながら、語彙を増やしていけるのではないかと。

実践3

授業の中で、キーセンテンスや重要表現が出てくると、その表現を制限時間内に何回声に出して読むことができるか、その後、同じ時間内に何回ノートに書くことができるかを、班対抗という形で取り組んだ。最終的には、もう1度丁寧に書いて、声に出してまとめた。

検証3

まずは読むだけをくり返し練習し、その後は集中して書くという単純な活動だったため、取り組めていない生徒はいなかったように思う。また、英語が得意だから書くのが早いとも限らず、英語の得手不得手に関係なく対等に競っていたことも、生徒の意欲につながったのではないだろうか。

研究の成果

今回、仮説から実践と検証を繰り返す過程で、授業中の生徒達に以前よりも活気が出てきたように感じる。どんな力を高めるにしても、生徒の実態や意欲を高める方法を考えなければならないことに改めて気付いた。そして、生徒達が集中して、意欲的に英語に触れていけるような活動や場面が必要となってくる。例えば、語彙力を高めようとした時にも、ただ単に単語を繰り返し書いて覚えさせ、テストをするだけでは、生徒の意欲をそいでしまう結果となり、効果は上がらない。単純な活動から徐々にステップを踏みながら、自己表現力やコミュニケーション能力につなげていくことが大切であると思う。

今後の授業改善の課題

今回、アクションリサーチに触れてみることで、これまでの自分の授業がいかに工夫なく行ってきたかということを感じた。今後はさらに生徒一人ひとりの実態を把握し、個に応じた指導をしていくためにも、自分自身の授業力を高めていかなければならない。また、それぞれの活動によってインプットしたことも、時間の経過とともに抜けてしまうことが多くみられるので、それらを定着させていく方法を探していく必要がある。

リサーチについての問合せ先:

職場電話

088-844-0105

電子メール

seibu-j@kochinet.ed.jp